

19) 佐賀県

上赤博文（西九州大学）

(1) 調査の取組み

今回の調査に佐賀県は2010年2月初旬に加入した。本調査開始まで1ヶ月を切る段階での加入は事務局はじめ準備を進めていた人たちに大変な負担とご迷惑をおかけしたが、快く受け入れてもらい、心から感謝している次第である。紙面を借りて御礼申し上げる。

佐賀県で行われたタンポポに関する調査研究は、教材として取り上げたものが1点あるだけ（宮脇ら1996）で、分布等の調査は皆無である。佐賀県下で確認されるタンポポは、シロバナタンポポ、セイヨウタンポポ、アカミタンポポの3分類群がほとんどで面白味に欠けるためであろう。佐賀県植物目録(1981)には他にカンサイタンポポ（2カ所）とツクシタンポポ（1カ所）が記載されている。しかし、ツクシタンポポについては近年確認されておらず、レッドデータブックさが(2000)において絶滅種とされた。

調査の呼びかけは佐賀植物友の会の2月例会と佐賀自然史研究会の総会（2月）を活用して行い、会報やニュースレターでも案内をした。佐賀新聞と読売新聞佐賀県版にも大きく取り上げてもらった。ただし、急な話だったので組織化することはできず、調査協力は個人に依存せざるを得なかった。調査協力者は60名、標本数は425であった。他県に比べると1桁少ないが、今回は致しかたないところであろう。

(2) 結果の概要

① 標本が採られた地域

佐賀県実行委員会に集まったデータ数は425個であるが、福岡県と鹿児島県（なんと種子島！）のデータも含まれ、佐賀県内のデータに限ると392個であった。国土地理院の25,000分の1地形図単位でサンプル数が10個以上は、佐賀北部76、小城59、佐賀南部47、牛津33、多久20、久留米西部19、古湯16、脊振山14、中原13、伊万里13、広滝11、徳須恵10で、以上12地域の合計は331(84%)であった。今回の調査では佐賀市周辺にデータが集中しており、県全体の傾向を見るには不十分であった。右図は全てのデータを佐賀県地図に落としたものである。比較的県内全域に散らばっているように見えるが、佐賀市周辺は1つのメッシュにたくさんのデータが重なっている。佐賀県内をカバーする25,000分の1地形図は全部で42枚ある。メッシュマップでは1枚の地形図を100等分のメッシュに分けている。42枚の中には福岡県や長崎県との県境、玄界灘や有明海を含む地図が相当数あり、佐賀県内の陸地だけを見るとメッシュ数の合計は2526である。今回の調査でデータが存在するメッシュは225個であった。メッシュ数で計算すると標本が得られたメッシュは佐賀県全体の8.9%であった。



なお、データが得られた住所を現在の市郡別に集計すると表1のようになる。すでに述べたように、佐賀市周辺にデータは集中している（小城市と神埼市が佐賀市に隣接）。

表1. 市郡別標本数

市郡名	佐賀市	小城市	神埼市	唐津市	多久市	伊万里市	鳥栖市	武雄市
標本数	134	84	44	24	17	16	12	12
市郡名	鹿島市	三養基郡	杵島郡	神埼郡	藤津郡	嬉野市	西松浦郡	
標本数	10	9	7	7	6	5	5	

② 確認されたタンポポの種類

佐賀県内で採集されたタンポポの種類および個体数は、在来種ではシロバナタンポポ79、キバナシロタンポポ4、カンサイタンポポ8、シナノタンポポ3、ツクシタンポポ3、外来種ではセイヨウタンポポ197、アカミタンポポ36、不明（外来種）55、その他として不明タンポポ6、無効1（花無し）である。まとめると在来種97(24.7%)、外来種288(73.5%)、不明・無効7(1.8%)である。前述の通り佐賀県内に生育しているタンポポのうちセイヨウタンポポ、アカミタンポポ、シロバナタンポポ（キバナシロを含む）の3分類群の頻度が高いことが経験的に分かっていたが、実際の調査データで合計すると371となり、不明・無効を除く385の96%を占める。ただし、採集頻度が低いカンサイタンポポ、シナノタンポポ、ツクシタンポポは合計14の標本が得られているが、今回の調査で確認された産地はそれぞれ1カ所ずつだけであり、上位3分類群の出現頻度はもっと高いと考えて良いだろう。

多くの場所でセイヨウタンポポが優勢であったが、いくつかの地域では異なる傾向が認められた。セイヨウタンポポの割合が比較的低かったのは地形図の名称で牛津、多久、佐賀南部である。特に牛津はアカミタンポポ、シロバナタンポポがセイヨウタンポポよりも多いという顕著な特徴があった。多久もややその傾向がある。三養基郡みやき町坂口地区ではその地域に見られるタンポポの99%以上がシロバナタンポポであり、他では見られない風景が広がっていた。「タンポポと言えば昔は白色であったが、今では黄色が多くなった」とある土地の古老から聞いたことがある。昔の植生を彷彿とさせる風景が坂口地区に残されていたと考えられる。

③ タンポポの種類と総苞外片の形態

表2はタンポポの種類別の総苞外片の形状（密着するか反り返るか）である。調査用紙に従い総苞外片の形状は1~5の番号で表現している。ただし、0は調査用紙に記載がなかったものである。

黄花在来種であるカンサイタンポポ、シナノタンポポ、ツクシタンポポは総苞外片の形状が1であり、一般的な特徴に一致する。シロバナタンポポは2が多いが、1、3、4もかなりの割合で出現する。セイヨウタンポポは4、5が8割近くを占めるが2、3もかなりの数が記録された。アカミタンポポは5を中心に3~5の範囲であった。

表2. タンポポの種類別総苞外片タイプ

	総苞外片の形状						合計
	0	1	2	3	4	5	
セイヨウタンポポ	7		13	39	70	68	197
アカミタンポポ	2			3	8	23	36
不明（外来種）	1		1	10	28	15	55
シロバナタンポポ	10	10	30	16	13		79
キバナシロタンポポ			2	1	1		4
カンサイタンポポ		8					8
シナノタンポポ		3					3
ツクシタンポポ		3					3
不明タンポポ		4	1	1			6
無効			1				1
合計	20	28	48	70	120	106	392

④ 特筆すべきタンポポ

今回の調査でこれまで佐賀県では報告されていないタンポポが2分類群確認された。キバナシロタンポポとシナノタンポポである。また、佐賀県では絶滅とされている（佐賀県希少野生生物調査検討会編著、2000）ツクシタンポポと思われる個体が再確認された。

<キバナシロタンポポ>

シロバナタンポポで埋め尽くされたみやき町坂口地区で、地区から出ようとした時にクリーム色のタンポポが目飛び込んだ。花の色以外はシロバナタンポポと同じ形質を示し、シロバナタンポポの変種、キバナシロタンポポという名前が付けられている（鈴木武、私信）。今回のタンポポ調査で、小城町と神埼町からもそれらしい個体が送られてきている。今春、確認する予定である。

筆者はキバナシロタンポポと思われる個体を2000年5月に佐賀県武雄市で採集している。鉢植えにして現在も栽培している。毎年晩秋～早春に開花を見ており、瘦果が増えたと思われる個体が周辺に生育している。これまでの観察からクリーム色の花色は遺伝的に安定していると考えられる。

<シナノタンポポ>

佐賀市金立公園でシナノタンポポを確認した。最初の情報ではカントウタンポポがあるというものだった。調査してみると金立公園の池周辺にかなりの個体数があることが判明した。4月は一面のお花畑状態で、しかも頭花の直径が7cmを超えるような巨大な花が所狭しと咲いていた。瘦果も大きく綿毛の直径も大きかったが、逆に瘦果の数は少なかった。金立公園の集団は総苞外片の幅が広いこと、角状突起が明瞭ではないことからシナノタンポポと同定した。花粉は均質であり、二倍体由来種であることが裏付けられた。ではなぜ、金立公園にシナノタンポポがあるのか？ 中部地方に分布の中心があり、これまで九州で記録がないタンポポが、以前からあったとは考えにくい。おそらく、公園が造成された時に植樹された木と一緒に持ち込まれたのであろう。

<ツクシタンポポ>

頭花が小さい点や総苞外片が内片の1/2以下で圧着しているなど、形態ではカンサイタンポポに類似しているが、花粉を調べると大きさがバラバラすなわち倍数体の個体が小城町の天山で採集された。総苞外片が狭卵形で角状突起がほとんど無いなど検索表から判断するとツクシタンポポになるので、今回その名前で報告する。天山の個体を鉢植えで栽培したところ7月末まで成長を続けたが、その後、手違いから枯らしてしまった。通常の在来種であれば、夏季は他の植物との競争を避けて休眠する生活史を示すことが知られており、実際に金立公園のシナノタンポポや脊振山のカンサイタンポポは夏場に確認することが困難であった。外来タンポポは、花こそほとんど付けないが夏場も健在である。ツクシタンポポが生態的あるいはフェノロジー的にどんな特徴を持つのかはよく分かっていないようで、もともとこのような特徴を持つのかあるいは外来種の遺伝子が含まれているのかは現時点では分からない。このように、天山の個体についてはまだいくつかの疑問点があるので、さらに観察を続ける予定である。最終データとしての全国マップでは福岡県と四国に数カ所のプロットがある。

⑤ 佐賀県の外来タンポポ

佐賀県の外来タンポポは前述の通り、セイヨウタンポポ197、アカミタンポポ36、不明（外来種）55の合計288であった。1990年代以降タンポポの雑種化に気づかれ（森田1997）、形態的に外来タンポポと思われる個体に雑種が見つかることが分かっている。今回のタンポポ調査では外来種の瘦果を検査し、葉緑体DNAから雑種タンポポの割合を算出している。その結果、佐賀県においてはセイヨウタンポポ群で85.9%、アカミタンポポ群で7.7%が雑種であることが判明した。興味深いのは他県との比較である。セイヨウ型雑種の85.9%は全国で最も高い数字であり、アカミ型雑種は低い方から2番目であった。雑種は在来種の柱頭（胚珠）に外来種の花粉がつくことで生じるとされているが、佐賀県には在来種の分布がほとんど無い。佐賀県内で雑種化が生じることは確率的にはほとん

ど考えられないため、今回のセイヨウ型雑種の結果はすでに雑種になった外来タンポポが他所から分布を拡げてきたことを意味している。アカミ型雑種はその割合が低いが、全国平均でも約30%とそれほど多くなく、地域によるアンバランスが認められている。葉緑体DNAを調査した大阪市立大学の伊東氏は「アカミ型雑種はまだ二倍体由来種の分布域からあまり分布を拡大していないのかもしれない」と考察している。

(3) おわりに

今回のタンポポ調査で、佐賀県では従来から言われていたとおりセイヨウタンポポが最も多く、シロバナタンポポ、アカミタンポポがそれに続くことが分かった。カンサイタンポポは脊振山山頂に知られていたが、今回の調査でも新たな産地は見つからなかった。キバナシロタンポポ、シナノタンポポ、ツクシタンポポが新たに見つかった。実体が不明なタンポポが4カ所から採集された。総苞外片は密着しており在来種の特徴を示すが、花粉は不揃いであった。筆者はまだ実物（生体）を見ていないので、4月以降に詳しい調査を行うつもりである。

佐賀県では、これまでタンポポの分布調査は実施されたことが無く、採集地点に偏りがあるとはいえ基礎データが得られたのは今回が最初である。タンポポの分布状況が今後どう変化するかは、継続調査をしないと分からない。筆者は1996年から6年間、佐賀県教育センターに勤務していた。当時、敷地内にはセイヨウタンポポとアカミタンポポが勢力を二分するように繁茂していたが、今回調査してみるとタンポポそのものが激減しており、アカミタンポポはわずか数株で、他は全てセイヨウタンポポであった。県教育センターの中庭や運動場は、年3回ほど、業者による草刈りと運動場の除草剤散布により管理されている。なぜ、タンポポが特にアカミタンポポが減ったのかを考える時、土地利用の変化があったのか、定期的な除草により植物相がどう変化したかは重要な視点となるだろう。

おそらく、県内各地で様々な変化が生じており、セイヨウタンポポだけで見ても、増えた、減った、無くなったという変化があるはずで、それがどんな意味を持つかを分析することは、今日的課題である生物多様性の保全を考える上で様々なヒントを与えてくれるに違いない。タンポポに限ったことではないが、なぜそこにその植物が生育しているのかを理解することは、地域の自然環境を知る上で今後ますます重要になると考えられる。

引用文献

馬場胤義（1981）佐賀県植物目録. 266pp. 佐賀植物友の会.

宮脇博巳・杉原浩・山崎工（1996）佐賀県産教材植物の研究(3)ータンポポ類. 佐賀自然史研究1(2):41-46.

森田竜義(1997)世界に分布を広げた盗賊種セイヨウタンポポ. 山口裕文編著「雑草の自然史」:192-208. 北海道大学図書刊行会

佐賀県希少野生生物調査検討会（編著）（2000）佐賀県の絶滅のおそれのある野生動植物ーレッドデータブックさがー. 472pp. 佐賀県環境政策局環境企画課.

